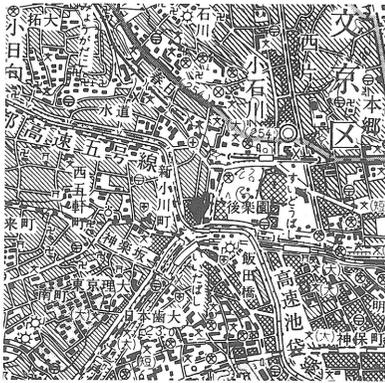


東京・旗本岩瀬家屋敷跡（新諏訪町遺跡）  
はたもといわせけやしき

- 1 所在地 東京都文京区後楽二丁目
- 2 調査期間 一九九二年（平4）一月～一九九三年三月
- 3 発掘機関 文京区遺跡調査会（文京区教育委員会）
- 4 調査担当者 加藤元信
- 5 遺跡の種類 遺物散布地・旗本屋敷跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代、近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（東京西北部・東京東北部）

本調査は、民間による開発事業に伴う発掘調査である。調査地は『御府内沿革図書』によれば、延宝年間から享保年間（一六七三～一七三〇）にかけては旗本岩瀬市兵衛が、延享三年から天保元年（一七四六～一八三〇）にかけては旗本稲生七郎衛門が、屋敷地を拝領していた土地にあたる。この場所は、江戸城外堀（神田川）の飯田橋（見附）の北東部に位置しており、

外堀に設けられた河岸は、「市兵衛河岸」の名で呼ばれていた。岩瀬家は常陸国鹿島郡大志崎村を知行地とした八〇〇石の旗本、稲生家は武蔵・上野・下野・下総・常陸に知行地を有した一五〇〇石の石高を有する旗本である。

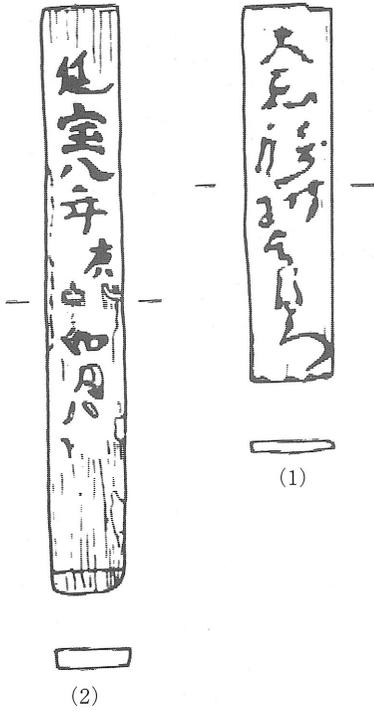
調査地点は、神田川をはじめとする複数の河川が合流し、江戸前島方面へと流入する直前に「小石川大沼」を形成していた土地を、市街地化するにあたって客土して整地した地域であるため、沖積低地のシルト層直上に、砂質土や洪積台地を構成する関東ローム層の掘削土などを用いた人工地盤が形成されている。

こうしたことから、地盤沈下対策として、松杭などを三、四本を一単位として土台杭とし、これらの杭の上に礎石などを据えた上に、建物の構築部材が置かれていた。

木簡二点は、人工地盤である地層中から、他の生活什器である陶磁器・漆器類などと混在する形で出土している。

8 木簡の積文・内容

- (1) 「大志崎村与左衛門」 (94)×22×2.5 019
- (2) 「延宝八年 庚申 如月八日」 (146)×18×5 011



- (1)は、常陸国鹿島郡大志崎村を意味するものと考えられる。大志崎村は岩瀬家の知行地にあたり、『沿革図書』の内容に符合する。
- (2)は、日付を記したものである。延宝八年は一六八〇年にあたる。
- (1)(2)ともに、具体的な用途については言及できないが、旗本の知行地から江戸屋敷に対して送られた年貢米などに付された付札と理解される。

9 関係文献

(株)興和不動産・文京区遺跡調査会『新諏訪町遺跡』(文京区埋蔵文化財調査報告書四、一九九三年)

(加藤元信)